所蔵図書紹介

いのちの砦 「釜石方式」に訊け
釜石医師会 医療継続に捧げた 医師たちの93日間
（芦﨑治著、朝日新聞出版）

近い将来、高い確率で大きな地震は起きる、その覚悟はある。準備もしている。でも、自分が住む街全体がダメージを受けたら？ 警察、消防、行政は機能せず、病院も被災し、電気、ガス、水道はもちろん、通信、移動手段までもが絶たれたら？ そしてそこに助けが必要な人たちがいたら？ それは、実際に起きた。「本書が追跡したのは、そこだった。そして「レスキュー機能ゼロ」地帯に、果敢に挑んだのが一般社団法人釜石医師会のドクターたちだった。本書はその記録である」

序章で著者・芦﨑治が記したように、この本は、釜石医療圏の医療従事者たちが、極限状況の中で示した「現場力」と「人間力」の物語だ。大きな揺れの後から、あるいはあの津波の直後から、彼らは、自らの判断で、やるべき仕事を始める。程なく、さまざまな「エリア」や「壁」をも超えて、医療現場はチームとして機能し始め、最終的には「釜石方式」と芦﨑が称える災害時医療モデルにまで昇華していく。圧倒的な取材力と写真で、約４００ページを一気に読ませる。

それにしても震災直後、外科の外来患者は病院にほとんど来なかったのだという。その、生か死かという厳しい事実に、「津波てんでんこ」という言葉に込められた教えと意味を改めて考えさせられた。そしてもうひとつ、この釜石方式が成り立ったのは、「三師会連絡協議会」やスポーツなどを通じた、日頃の顔の見える付き合いの賜物だし、訪問診療を重視していた医師たちがいたからこそ、だ。こんな地域、日本にいくつあるのだろう。（あ）

四六判　400ページ
定価1,500円
朝日新聞出版
（2015年5月発行）

フラノマルシェの奇跡
小さな街に２００万人を呼び込んだ商店街オヤジたち
（西本伸顕著、学芸出版社）

北海道富良野市の市街中心部に活気を取り戻すべく企画された「フラノマルシェ」。その誕生までの、商店街に関わる人々の奮闘記。マルシェのオープンは２０１０年春。この本の発行はその3年後。サブタイトルに謳われた来客数２００万人（累計）を達成し、きちんと「育った」ことを見届けた上での出版だったのだろう。

では、本の発行からさらに3年経った今はどんな状況だろう。調べてみると、隣接地に「フラノマルシェ2」が２０１５年夏にできていた。ということは順調なのだな、と、さらに数字を拾ってみると、来客数はオープン以来5年連続の増加、昨年春までの累計で３６０万人になっていた。初年度は55万人、5年目は85万人だ。

ちなみに富良野市の人口は２０１６年4月時点で2万３０００人弱。フラノマルシェができた２０１０年春から１５００人ほど減っていた。年間１８０万人という富良野への観光客の数を考えても、この来客数はすごい。何しろフラノマルシェができる前、富良野中心部の商店街へ立ち寄る観光客は年間8万人だったというのだから。

フラノマルシェという中心市街地活性化の核ができ、さらに他の生活関連施設も完成し、富良野が目指すコンパクトシティとしての形が整ったようだ。この街がさらにどう変わっていくのか、まだ見ぬ続編が読みたくなった。それにしてもこのオヤジたち、ちょっとかっこ良すぎ。（あ）

四六判　216ページ
定価1,600円
学芸出版社
（2013年7月発行）